

令和8年産水稻の栽培管理について

令和8年8月
備前広域農業普及指導センター

1 気象の経過と生育状況

(1)気象概況

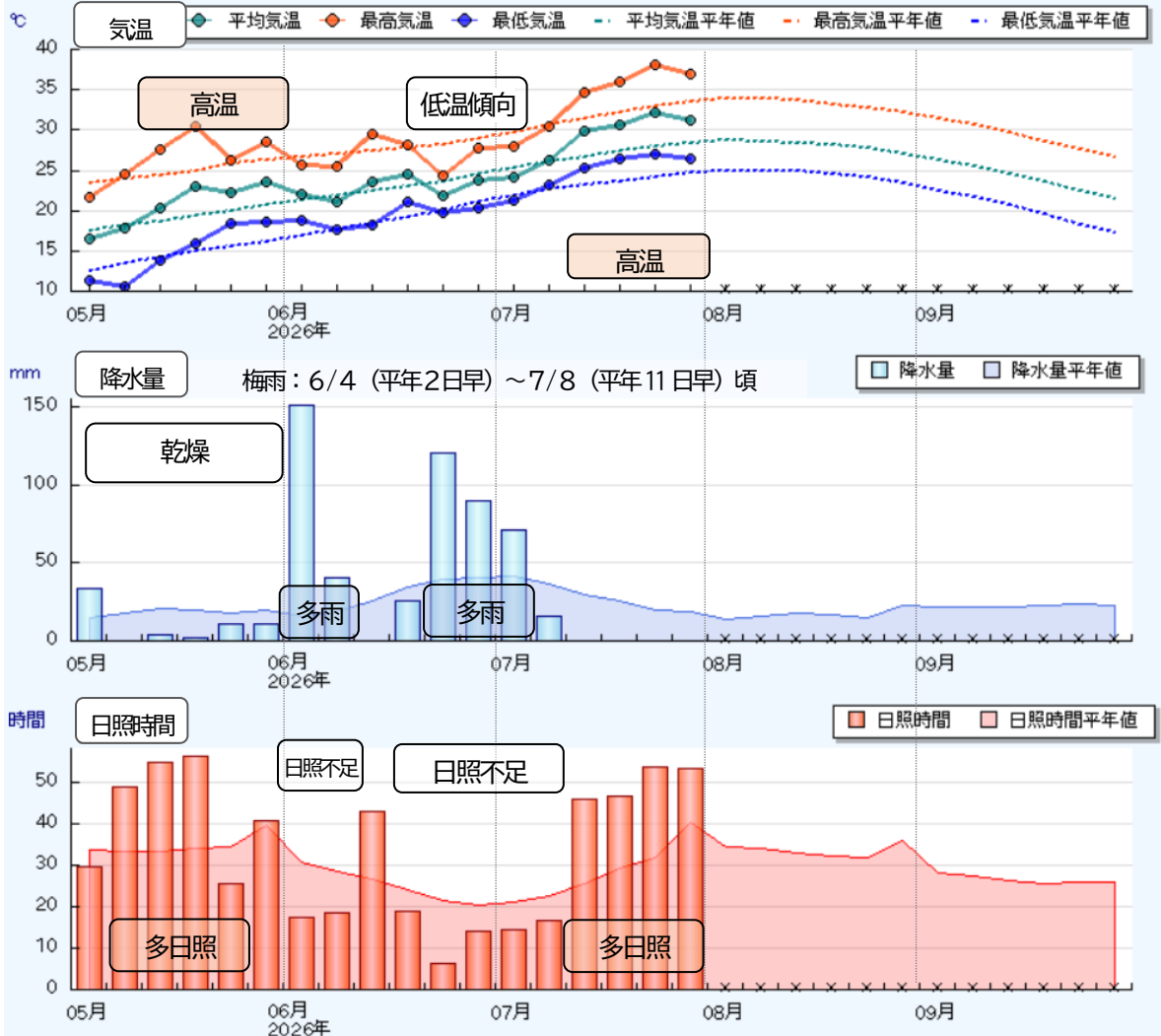


図1 気象の推移(アメダスポイント:岡山)

(2)水稻の生育概況

- ・育苗期は昼夜の気温差が大きく高温であったことから、一部で苗立ち枯れ病の発生がみられた。
- ・移植後の生育は、6月下旬の低温傾向や日照不足により分げつが遅れていたが、回復しつつある。
- ・一部でジャンボタニシが発生しており、食害が散見される。

表1 気温、降水量、日照時間の月別値

	5月	6月	7月
平均気温(℃)	20.7	22.8	29.1
平年値(℃)	19.1	22.7	27.0
平年差(℃)	1.6	0.1	2.1
降水量(mm)	62	428	87
平年値(mm)	113	169	177
平年比(%)	55	253	49
日照時間(時間)	255	118	230
平年値(時間)	206	154	170
平年比(%)	124	77	135

2 気象状況に応じた栽培管理

- ・高温の影響により、水稻の収量・品質の低下や病害虫の多発による被害が心配される。
- ・水管理や施肥管理、病害虫対策などを適切にして、夏の高温に備える。

3か月予報(8月～10月)		※令和8年7月21日 広島地方気象台発表
8月	平均気温:高い	降水量:ほぼ平年並
9月	平均気温:ほぼ平年並み	降水量:ほぼ平年並
10月	平均気温:平年並みか高い	降水量:ほぼ平年並

(1)高温多照の場合

- ・高温多照の場合、イネが過繁茂になりやすく、病害は「紋枯病」「籾枯れ細菌病」、害虫は「トビイロウンカ」「コブノメイガ」「斑点米カメムシ類」が多発しやすい。
- ・出穂期以降に高温多照が続く場合、根傷みによる登熟不良を招きやすい。根の活力を維持するため、可能な範囲で間断灌漑を行い、地温と水温の低下を図る。
- ・収穫適期が前進し、刈遅れると光沢のない老化米や茶米(褐色粒)となり、品質が低下する。

(2)曇天多雨の場合

- ・曇天多雨の場合、イネが軟弱徒長しやすく、病害が発生しやすい。高温の場合、「紋枯病」の発生が助長されやすい。

(3)台風への対応

- ・台風接近が予想される場合、早めに用水環境の確認を行い、接近直前から接近後は、絶対に水田周辺に近づかない。
- ・台風接近が予想される場合、株元の揺れや倒伏防止のため、深水管理としておく。
- ・台風通過後は、イネの茎葉が損傷し、吹き返しの強風による脱水症状が発生しやすいため、数日間は湛水状態とする。
- ・ただし、イネが倒伏し穂が水に浸かっている場合は、穂発芽を防ぐため、早急に落水する。

3 水管理

- ・田の中の温度を下げて、稲体の活力を維持するため、「間断灌漑」を基本に水管理を行う。可能であればかけ流しや夜間に灌水する。

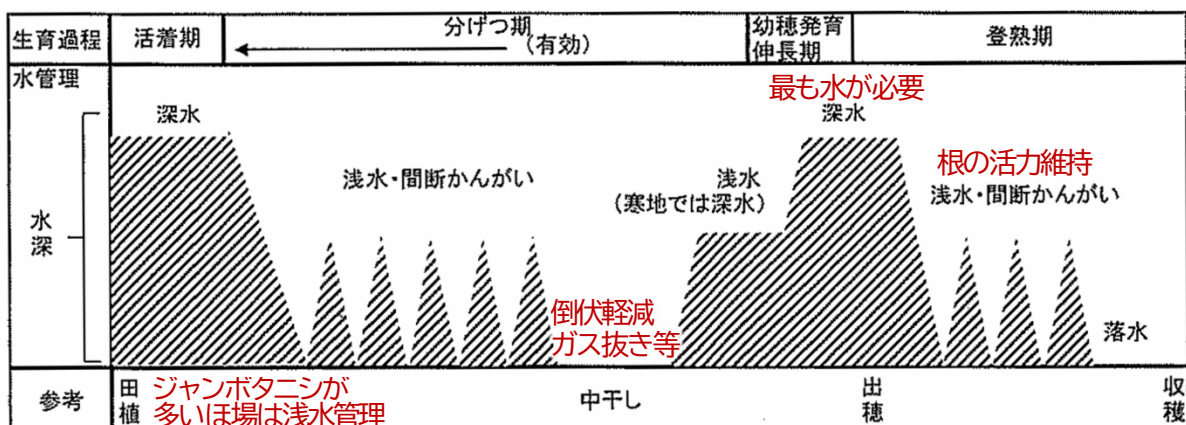


図2 水管理のイメージ

(1)中干し(土用干し)

【効果とねらい】

- ①窒素吸収を抑制し、無効分げつを抑制する、直下根の発達を促す。
 - ②土壌中のガスを抜き、根腐れを防ぐ。
 - ③窒素吸収を抑制し、倒伏軽減、受光体勢の改善、登熟向上を図る。
 - ④土を締めて、倒伏軽減、収穫時の作業能率向上を図る
- ・必要茎数の8割を確保したら、生育状況とほ場の排水性を考慮して中干しを実施する。
 - ・干す程度は、足跡がつく程度～軽くひび割れが入る程度を基本とする。
 - ・生育過剰の場合は強めに、生育不足の場合は軽めに実施する。
 - ・中干し後の入水は、根腐れ防止のため、走り水程度から始め、徐々に湛水するようにする。

(2)幼穂形成期～出穂期

- ・特に、穂ばらみ期～出穂期は、茎葉からの蒸散量が多く、水分不足が幼穂の伸長に影響するので、水を切らさないようにする。
- ・気温が高く、根腐れが進みやすい時期のため、間断灌漑やヒタヒタ水として、土壌中へ酸素が供給されやすい状態を維持する。
- ・35℃以上の高水温が続く場合、可能であればかけ流しや夜間灌水により水温・地温の低下を図る。

(3)出穂期～落水期

- ・根の活力維持のため、出穂後は間断灌漑やヒタヒタ水を継続する。
- ・落水する時期は、出穂25～30日後を目安とし、ほ場の排水性を考慮して、収穫作業に支障がないよう落水する。
- ・作業性を優先して、早期落水する事例が見られるが、落水が早すぎると、未熟粒や屑米、胴割粒や茶米が増加して収量・品質低下を招きやすい。
- ・排水が悪く、収穫作業に支障をきたすような場合は、中干し前に溝切りを行うか、間断灌漑の落水期間を長めにとって、徐々に土を締めておく。

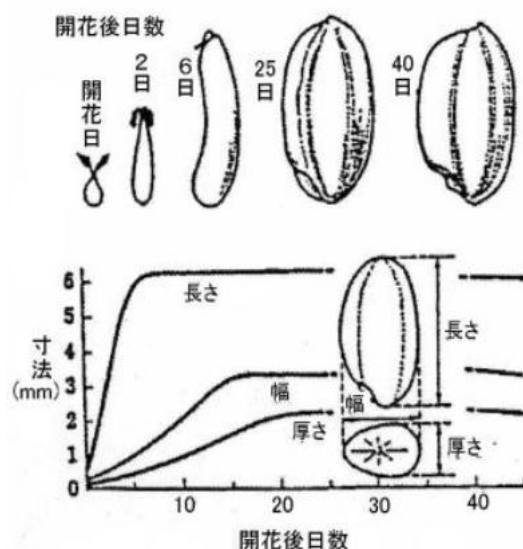


図3 玄米の外形発達の経過

4 肥培管理

- ・基肥1回施肥型の肥料は、基本的には穂肥等の施用は必要ない。
- ・分施肥体系(基肥+穂肥)の肥料は、施用時期に「葉色が濃い」「草丈が長い」などの場合、倒伏が懸念されるので穂肥の施用を遅らせたり、2回施肥の分施肥体系では1回目の施用を省略したりする。

表2 肥料の特性

銘柄	穂肥の施用回数や時期
基肥1回施肥型 JA おかやま専用 588 中晩生 JA おかやま専用 590 晩生 JA岡山ヒルカ専用基肥一発型 JA岡山朝日・アケボノ専用基肥一発型 LP444-E80 など	・基本的に穂肥は不要。 ・栽培期間中の高温・多照の影響により肥効が早期に切れることが予想される場合は、生育状況を見て幼穂形成期以降～穂揃い期に、窒素成分で 1.5kg/10a 程度(「化成肥料 14-8-8」では 10kg/10a)の追肥を行い、登熟期の窒素栄養不足を補う。
基肥1回施肥 (+追肥型) LP444-D80・E80 など	・表3の穂肥1回目の時期に「化成肥料 14-8-8」などを追肥する。 ※直播栽培の肥料もちの悪い田
基肥・穂肥2回施肥型 優作、パワー有機ライス など	・品種に合わせて出穂の25～18日前に1回施用する(図4、表3)。 ・品種や葉色の推移によって施用時期や量を調整する。
化成分施型 ・化成肥料 14-8-8 など	・出穂の25～18日前と出穂10日前頃の2回施用する。 ・1回目は品種に合った施用時期にする(図4、表3)。 ・品種や葉色の推移によって施用時期や量を調整する。

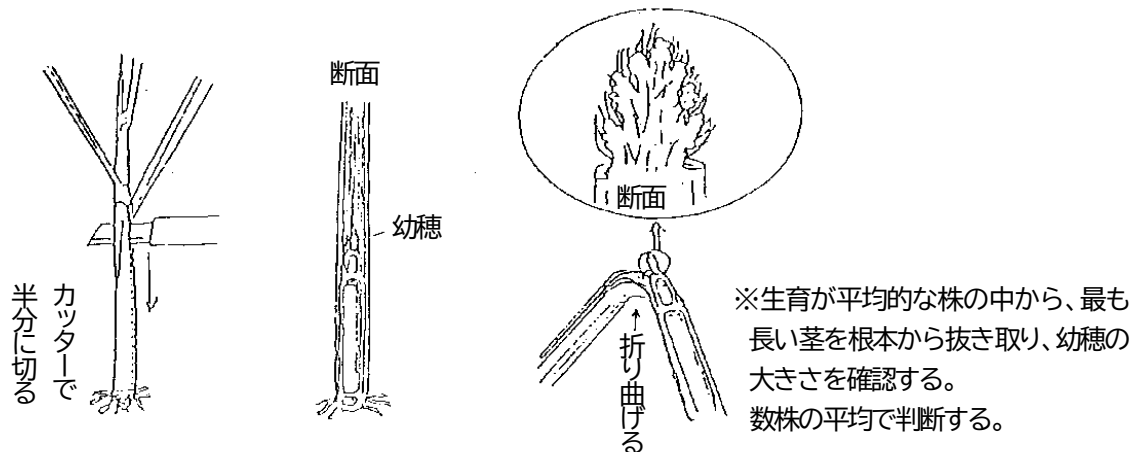


図4 施用時期の確認方法

表3 幼穂の大きさと出穂前日数、穂肥の時期

幼穂長	出穂前	幼穂段階	穂肥の時期
0.5～1.0 mm	-25 日	二次枝梗分化期	穂肥 1 回目(ヒノヒカリ)
1.0～1.5 mm	-23 日	穎花分化前期	穂肥 1 回目(きぬむすめ、アケボノ)
3.5～15mm (10mm 前後)	-18 日	穎花分化後期	穂肥 1 回目(朝日など倒伏しやすい品種)
4～18cm	-12 日	減数分裂期	穂肥 2 回目(各品種共通)

【穂肥の効果】

- 1 回目: 幼穂の成長、葉色の回復、籾数の確保。施用時期が早いと下位の節間が伸長し倒伏しやすくなる。
- 2 回目: 葉色の回復、炭水化物の生産、登熟の向上。

5 病害虫・雑草対策

(1)今後の発生予想

表4 病害虫発生予想

(岡山県病害虫防除所 令和8年7月30日発表)

病害虫名	発生時期	発生量	病害虫名	発生時期	発生量
葉いもち(中・晩生種)	—	やや少	セジロウンカ	—	並
穂いもち(極早生早生種)	—	やや多	トビイロウンカ	並	やや少
紋枯病	—	やや少	イチモンジセセリ	並	並
白葉枯病	並	並	コブノメイガ	—	並
穂枯れ(早生・中生種)	—	やや多	カメムシ類	—	並
ニカメイガ	並	並			

(2)本田防除

- ・JA 栽培暦を参考に、出穂期前後(穂ばらみ期、穂揃期)の基幹防除2回を徹底する。
- ・発生予想情報に注意しつつ、ほ場観察を十分にを行い、的確に防除する。
- ・粒剤を散布する場合は、予防的な効果となるため、適用範囲内で早めの散布を心がける。

(3)主な病害虫

●トビイロウンカ

【被害の発生と生態】

- ・ウンカは日本国内では越冬はせず、中国大陸南部で発生したウンカが、梅雨前線の南部に発達するジェット気流に乗り飛来し、ほ場で増殖を繰り返して夏から秋にかけて多発生する。
- ・多発すると吸汁害によりイネの黄化が起こり、排せつ物は黒いカビができる「すす病」となり、著しい場合は「坪枯れ」となり収量、品質を低下させる。

【対策】

- ・ウンカ(幼虫、成虫)が1株当たり 10 頭以上または短翅型雌成虫が1株当たり 0.2 頭以上発生している場合は、直ちに防除する。
- ・ウンカ類は、株元で増殖するため、株元に薬剤が届くように注意する。



図5 トビイロウンカ
農作物病害虫雑草図鑑より引用

●コブノメイガ

【被害の発生と生態】

- ・蛾の幼虫が葉を縦に巻き、内側から食害するので、葉が白いすじになって目立つ。
- ・肥料のよく効いた田で多発することが多い。

【対策】

- ・チョウ目に効果のある箱施用剤で7～8月のコブノメイガを抑える。
- ・箱施用剤の残効が切れた後は、出穂前に効果のある薬剤を散布する。



図6 コブノメイガの成虫(左)と被害葉(右)
農作物病害虫雑草図鑑より引用

●斑点米カメムシ類

【被害の発生と生態】

- ・周囲より出穂が早い田、早生品種、休耕田や牧草地の周辺、山寄りの水田での被害が大きい。
- ・イネの出穂前は、イネ科雑草に生息し、稲が出穂すると水田へ移動してくる。

- ・傾熟期から乳熟期にかけての約2週間が、最も被害を受けやすい。
- ・籾殻の吸汁跡が目立たないため、穂を見ただけでは、被害に気づきにくい。籾摺り後に分かることが多い。加害したカメムシの種類によって斑点の出方が異なる。



図7 様々なカメムシによる斑点米

【対策】

- ・田の中にカメムシを追い込まないために出穂前後14日間は畦畔の草刈りをしない。
- ・カメムシの種類によって、薬剤散布の適期が異なるので注意する。

小型カメムシ(アカスジカスミカメ等)

〔1回目〕穂揃期

〔2回目〕その7日後

大型カメムシ(クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、ミナミアオカメムシ、トゲシラホシカメムシ等)

〔1回目〕穂揃期から3～7日後

〔2回目〕その7日後

イネカメムシ〔1回目〕出穂期(不稔防止)〔2回目〕その7日後(斑点米防止)

●紋枯病

【被害の発生と生態】

- ・分げつ最盛期以降、高温多湿の時に発病が多い。
- ・主に葉鞘に発生し、初め水際の葉鞘に暗緑色で不鮮明な斑紋ができる、その後楕円形で灰色から灰白色の病斑ができる。
- ・上位第3葉以上に病勢が進むと被害が大きくなる。

【対策】

- ・上位葉鞘へ進展するようなら、遅れないように防除する。
- ・粒剤は、出穂2～3週間前に散布にする。



図8 紋枯病の病斑

農作物病害虫雑草図鑑より引用

●雑草(ヒレタゴボウ)

- ・熱帯アメリカ原産の帰化植物で、黄色の花が特徴である。
- ・秋には大量の種子を落とすため、近年発生が増加している。
- ・中干し前後の7月～8月にかけて急速に成長する。
- ・初期除草剤だけでは発生を抑えることが難しく、ダラダラと発生するため、中干し前後の中後期除草剤散布が有効である。



図9 ヒレタゴボウの花

農作物病害虫雑草図鑑より引用

表5 ヒレタゴボウに効果のある薬剤の例

薬 剤 名	使用時期	10a 当たりの使用量	使用方法	回数
バサグラン 粒剤	[移植]移植後15日～収穫45日前まで	3～4kg	落水散布又はごく浅く湛水して散布	1回
	[直播]稲3葉期～収穫45日前まで	3kg		
バサグラン 液剤	[移植]移植後15日～収穫45日前まで	薬剤:500～700ml 希釈水:70～100ℓ	落水散布又はごく浅く湛水して散布	2回
	[直播]は種後35日～収穫45日前まで			
ロイアント 乳剤	[移植]移植後20日～ノビエ5葉期 ただし、収穫45日前まで	薬剤:200ml 希釈水:25～100ℓ	落水散布、ごく浅く湛水して散布又は湛水散布	2回
	[直播]稲3葉期～ノビエ5葉期 ただし、収穫45日前まで	薬剤:200ml 希釈水:100ℓ	乾田・落水状態で雑草茎葉散布又は全面散布	
2,4D アミン塩	有効分けつ終止期～幼穂形成期前 但し収穫60日前まで	薬剤:80～120g 希釈水:70～100ℓ	落水状態で散布	1回

6 収 穫

- ・計画的な収穫を行い、すみやかに乾燥する。早刈りは青米や未熟粒の多発、刈遅れは茶米や胴割米が多発し、品質低下の原因となる。
- ・収穫適期は、出穂後日数と積算温度からおおよその目安を定め、実際に穂を観察し、青味籾率から最終判断する。
- ・刈取り始めの籾の水分は、25～26%程度が目安である。

<青味籾率の確認方法>

- ①平均的に育っている株の最も丈の高い穂を選ぶ。
 - ②穂の中で不稔籾を除き、青味籾の割合を見る。
- ・特に「にこまる」は、登熟期が低温の場合に成熟が遅れたり、青未熟粒が多発したりすることがあるため、籾の成熟度合いを見て適期を判断する。



図10 収穫適期の青味籾の割合

表6 品種ごとの収穫適期の目安

品 種	出穂後積算温度	出穂後日数	青味籾率
きぬむすめ	950～1,100℃	38～45日	15～10%
つやきらり	1,050～1,200℃	42～50日	
ヒノヒカリ	950～1,100℃	38～45日	
朝日、アケボノ	900～1,100℃	40～50日	
にこまる	1,000～1,200℃	40～50日	

注1) 青味籾率とは不稔籾を除いた全籾のうち、青味が残っている籾の割合

注2) 水稻栽培指針、作物研究室主要成果、JA岡山「つやきらり栽培のしおり」より引用

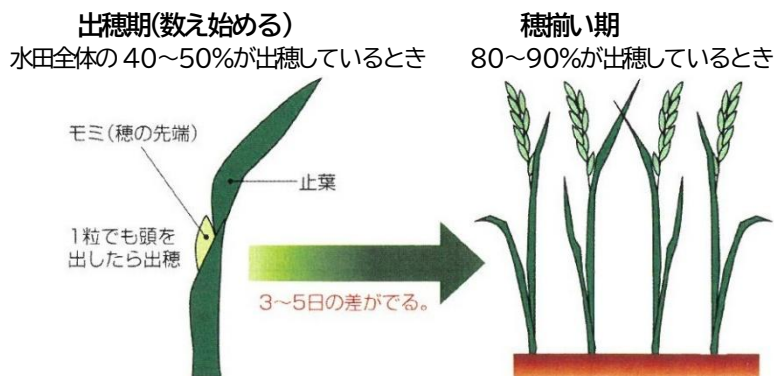


図11 出穂期と穂揃い期の見分け方

7 乾燥・調製

- ・計画的な収穫を行い、刈取後はすみやかに乾燥作業に入る。
- ・収穫後すぐに乾燥作業に移れるよう、乾燥機の容量に合った計画的な収穫を行う。
- ・収穫後の籾を乾燥機へ入れず、コンバイン袋のまま置いておくと、ヤケ米(発酵米)となり品質低下の原因となる(水分25%の籾は、気温25℃の場合5時間程度で変質し始める)。
- ・仕上げ水分は14.5～15.0%を目標とし、ゆっくりと乾燥させる。
- ・過乾燥は、形質や食味の低下を招くおそれがあるため、適正な籾水分になるよう乾燥する。
- ・水分が高い籾は十分に常温送風してから加温し始め、毎時乾減率を0.8%以下に抑えてゆっくり乾燥させる。

■農作業中の熱中症を予防しましょう■

- ・高温時の作業は極力避け、日陰や風通しのよい場所で作業しましょう。
- ・のどの渇きを感じる前に、こまめに水分・塩分を補給しましょう。
- ・単独の作業はできるだけ避けましょう。単独で作業を行う場合は、時間を決めて家族などと連絡を取り合いましょう。
- ・帽子や吸湿速乾性の衣服の着用、空調服や送風機を活用しましょう。
- ・一人で作業されている方に「休憩を取っていますか」、「家族の方などと連絡が取れますか」などの声かけをしましょう。熱中症「声かけ隊」

■ストップ！農作業事故■

作業環境を確認し、危険性に配慮しましょう！



こちらから(動画)

■農作業の安全対策情報を公開中■

農林水産省公式 YouTube チャンネル「Maffchannel」で農業における事故事例と安全対策を公開しています。

■環境負荷軽減の取組みについて■

(1)被覆殻流出防止

- ・あぜが崩れていないかを確認し、必要に応じてあぜ塗りやあぜシートを設置する。
- ・入水までに田面の高低差をなくし、代かきは浅水で行う。
- ・移植前の落水は行わず、自然落水で水位調整をする。
- ・緑肥や堆肥などの活用や、栽培暦等に基づいた適正施肥に努める。

(2)温室効果ガス(メタン)の発生抑制

- ・通常の中干し期間より、1週間程度延長する。
- ・稲刈りが終わってからの秋の間に耕うんを行い、稲わらや稲株のすき込みを行う。

※ほ場条件や作業体系に応じて、無理のない範囲でできることから取り組みましょう。

■施肥コスト低減対策技術を公開中■

農業研究所が開発した施肥コスト低減対策技術を紹介しています。

- ・レンゲやナタネを緑肥としてすき込む場合の肥料計算ソフト
- ・児島湖流域の6割の水田でりん酸やカリウムが少ないL字型が適する説明
- ・鶏ふん施用から入水まで期間を考慮した施肥設計方法 等



こちらから(HP)